

## 闇なる死から光なる生への転換

### ◆闇の中の美

熊谷守一（クマガイモリカズ）が東京美術学校西洋画科在学中に描いたモデルによる「裸婦」作品群には、率直に言えば、熊谷守一らしさは見受けられない。卒業前年に予期せぬ列車飛込み自殺による若い妊婦の半裸死体スケッチから意欲的に取り組んだ「裸死体」制作からが大げさにいえば熊谷守一、九七年間の生涯を決定づけたと言ってもいいのかもしれない。生きているモデルの裸像に見出せなかった「美」を、むしろ暗闇に放り出された裸死体に発見したと思うからである。

私はその死から生への逆転劇と熊谷守一が晩年に語る「目に見えないもの」がどのように繋がるのかを探ろうとしたのである。

熊谷守一は明治三五年美術学校在学中に一月も父の死を知らないまま、長い一人旅を続けていた。そして八年後、中津川付知（つけち）の実母の死には、危篤の電報を東京で受けてすぐに、二日かかる列車で駆けつけ、臨終に間に合った。その時の熊谷守一の日記によれば老



古川秀昭

いた母の意識が衰え、「生物の終わりの感」、「葬儀の下らぬこと」など生き返らねば空しいことなどが記されている。この日記に記された守一の産みの親の死に対する眩きがあの妊婦の裸死体と重なって「死から生へ」向かう守一の葛藤を表わしている。実際この母の死を契機に、まる五年間、東京から遠く離れた付知に籠る生活を過ごす。「蠟燭（自画像）」で文部省美術展賞状を受賞して、今後の期待の的となった時に、突然画壇から遠ざかるのである。そして後にこの頃について「目に見えないものを描こう……」と思つた時だったというのである。常に要領が悪く、また退き退き生きた熊谷守一の制作の精神と特異な感性を示しているような気がする。

### ◆熊谷守一の不思議な目

熊谷守一は、目に見えないものを研究者のように観察し、哲学者のように深く洞察する。そしてもつとも平明な形で「目に見えないもの」をそつと示してくれる。例えば作品「泉」は山の中の生活で大切な水を探す時に「水が岩の中で動く」という気配を描いている。また日本画

「蒲公英と蝦蟇」（たんぽぽぼぼにがま）では決してテーマとなりえない奇妙な蒲公英と蝦蟇の組合せで、鑑賞すればするほど、蒲公英と蝦蟇がそれぞれ全く無縁であるが故に、いかにも「莊嚴」そのものを感じさせる。

「目に見えないもの」を描こうとする熊谷守一の目は、例えば庭の蟻を何カ月も観察して「蟻は歩き出すときは、左側の二番目の足から動き出す」という法則を見つけた。このような愉快な熊谷法則は、小学生から高齢者まで誰もが生涯忘れないだろう。また常識を超えた眼差しは、一九二三年の関東大震災の日記で知ることができる。「大地震 トンボ ユウクリ 飛ンデイル……」とある。東京の東中野に住んでいた時であった。これは四三歳の守一が単にトンボをたまたま見ていた日記ではない。地震でもない、トンボでもない、何か見えない何かに憑りつかれているとしか思えない。行きつくところもはや「死から生」への向かうある種の「美の靈性」であろう。

今回私は、熊谷守一が父の死、遭遇した裸死事故、母の死、友人青木繁の死、吾が子の死を通して闇なる死から、光なる生へと導く美の靈性を述べたつもりである。

### ◆目に見えないものへ、そつと導く人、熊谷守一

最後に今回私が新たに知った熊谷守一像の背景に信時潔という音楽家との関係があった。二人の出会いが、画家熊谷守一をあらゆるもの、あらゆることから自由へと解き放つたと言っても過言ではない。信時潔との出会いからこの世の一切のことが、大して重要ではなくなつた。良くも悪くも普通なら人に迷惑をかける事柄でも一向に



『熊谷守一』  
古川秀昭 著  
3200円 2019.9刊

ふるかわ・ひであき  
1944年 旧満州奉天市（現瀋陽市）に生まれる。  
OKB ギャラリー・おおがき館長・前岐阜県美術館館長・モダンアート協会会員・日本美術家連盟会員。  
著書 『熊谷守一油彩画全作品集』（監修・編集委員、求龍堂、2004年）他。